

山本有三文庫の蔵書調査

残された文庫資料が語る

山本有三の世界一

東京都立多摩図書館情報サービス係

二階健次・小川正子

2007(平成19)年の今年、山本有三生誕120周年の記念すべき年に当たる。都立多摩図書館が管理する「山本有三文庫」は、1975(昭和50)年山本有三氏のご遺族から東京都に寄贈されたものである。当文庫には氏が大正初期から晩年までに愛読し、趣味はもとより創作や調査研究に使用した文学、国語学、歴史を中心とした図書(和装本も含む)約13,000冊、雑誌約300誌が収蔵されている。

都立多摩図書館では2002(平成14)年度以降、館の特色として「文学」に関するサービスを提供しているが、山本有三文庫の紹介は館を支える重要な柱の一つと考え、文庫資料の展示を行っている。

文庫の内容は、「書名、著者、出版社、出版年」を記載し、書名順配列した『山本はな・有一氏寄贈リスト』の冊子によって知ることができる。しかし、この冊子だけでは、文庫の特色や資料分野の傾向まで知ることは困難である。

そこで、生誕120周年を期に、文庫全体の蔵書構成を調査するとともに氏自身による書き込み資料も調査し、どのような資料が使われて山本有三文学が形成されていったのか、残された文庫資料が語る山本有三の世界を探ってみた。

第1部 山本有三文庫について

1 文庫の概要

都立多摩図書館では、地下二階電動書庫の一部を使用してそのスペースを「山本有三文庫」として管理している。

文庫の資料はいずれも古く、資料保全が欠かせない。資料はできるだけ原型を残すように補修し、カイルラッパー(0.5mmほどの中性紙で本全体を包み込んだ劣化防止の容器)で保護するなど、永く都民にサービス提供できるようにしている。さらに貴重な和装本の一部は専用の書棚に別置保管している。雑誌は1冊1冊グラシン紙で保護している。資料の劣化が激しいため協力貸出はできないが、来館者には他の一般資料と同様、閲覧、コピーサービスを行っている。



【地下書庫の山本有三文庫】

2 山本有三のプロフィール

山本有三は、明治・大正・昭和に生きた著名な文化人であり、劇作家、小説家である。生没年は1887（明治20）年7月27日～1974（昭和49）年1月11日。山本元吉、ナカの長男として生まれた。本名は勇三。栃木県下都賀郡栃木町大字栃木（現栃木市万町）出身。でっち奉公などをしたのち28歳で東大独文学科を卒業。

学生時代から戯曲家として認められ、一高同級生の豊島与志雄、芥川竜之介、久米正雄らとともに第三次「新思潮」をおこした。近衛文麿も一高時代の同級生である。

処女作は高校時代に書いた戯曲『穴』で、1910（明治44）年に雑誌『歌舞伎』3月号に筆名を山本染瓦^注で発表、上演もされた。「有三」を使うのは1914（大正3）年27歳頃からである。

【注】 この名前の読みについては不詳。『山本有三全集 第1巻』（新潮社 1977）のp428に、「山本勇三は、「山本染瓦」という筆名を『穴』を発表した時にだけ使った。染という字画が好きだったので、そうしたまでだ、と作者は言っていた」とある。

1920（大正9）年、『生命の冠』を雑誌『人間』1月号に発表、2月に明治座で初演されると劇作家として存在を認められるようになった。その後、東京朝日新聞にいた土岐善麿の勧めで本格的に小説を書き始め、1926（大正15）年に『生きとし生けるもの』を新聞連載し、『波』『女の一生』を続いて発表し、小説家としても活躍した。1937（昭和12）年、『路傍の石』を朝日新聞に連載するが、検閲で完成されなかった。1942（昭和17）年には、戯曲『米百俵』を雑誌『主婦の友』に発表した。有三の作風は、平明な文体による人道主義、理想主義の立場を貫き、健全な市民文学として、広範な読者の共感を得た。

一方で、かねてより青少年教育にも関心が高く、1942（昭和17）年に自宅を「ミ

タカ少国民文庫」として開放した。戦局が急迫したため文庫は閉じられたが、三鷹市と栃木市の小学校に児童図書 2,000 冊を寄贈した。

また、戦前戦後を通じて一貫して国語運動に取り組み、当用漢字や現代かなづかいの制定に尽力した。1945（昭和 20）年 12 月には、三鷹国語研究所を邸内に開設した。1946（昭和 21）年に貴族院議員、1947（昭和 22）年から 1953（昭和 28）年までの 6 年間は参議院議員として、主として文部委員会で活躍した。1965（昭和 40）年には文化勲章が授与された。

死の前年より、毎日新聞に『濁流 雑談 近衛文麿』を連載するが、氏の死で中断して終わった。享年は 86 歳であった。

【注】 山本有三の年譜は『山本有三全集 第 12 巻』p347～371 に詳しく掲載されている。

3 山本有三蔵書の東京都への寄贈

山本有三と東京都の関わりは、次のとおりである。

- ・ 1956（昭和 31）年 児童書を中心とした「竹の子青少年文庫」19,000 冊が三鷹の邸宅の一部と共に東京都へ寄贈される
- ・ 1958（昭和 33）年 東京都は、都立教育研究所三鷹分室「山本有三青少年文庫」として、児童図書館及び教育相談等に使用する
- ・ 1975（昭和 50）年 遺族から山本有三氏の蔵書約 13,000 冊が東京都へ寄贈（日本近代文学館及び陽明文庫への寄贈分を除く）される
- ・ 1976（昭和 51）年～1986（昭和 61）年 都立江東図書館において「山本有三文庫」として蔵書が公開される
- ・ 1987（昭和 62）年 故人ゆかりの多摩地域に都立多摩図書館が開館したのに伴い都立江東図書館より文庫を移管、現在に至る

4 山本有三の資料の行方

山本有三が 1974（昭和 49）年 1 月 11 日に亡くなったあとご遺族により、近衛関係資料を陽明文庫に、蔵書の一部約 1,700 点を生前に顧問を勤めた日本近代文学館に、蔵書の残り約 13,000 点が東京都に、それぞれ寄贈された。

日本近代文学館

【東京都目黒区駒場 4 - 3 - 55（駒場公園内）電話番号：03-3468-4181】

財団法人日本近代文学館は、1962（昭和 37）年 5 月、ひろく明治以降の近現代文学関係の資料を収集・保存し、一般利用に供するため、高見順、川端康成、小田切進をはじめとする文壇・学界・マスコミ関係の有志 113 名によって発起され、各界に文学ミュージアム設立の欠くべからざることを訴え、発起者たちの献身と各界から

の絶大な援助によって、目黒区駒場公園内に 1967(昭和 42)年 4 月、竣工・開館した。この間、館の設立に参加した人はおよそ 15,000 名に達している。開館後も引き続き、文壇・学界関係者の奉仕と、出版社・新聞社その他各方面からの強い協力によって維持運営されている。

現在の館の代表者は、初代の高見順から数えて 6 代目の理事長となる中村稔(詩人・弁護士)、副理事長は黒井千次(作家)、専務理事は十川信介(学習院大学教授)である。

収蔵資料は 122 万 4 千点(内図書 46 万冊、雑誌 1 万 8 千タイトル)で、2002(平成 14)年以降の図書と雑誌データが入力されている。2007(平成 19)年 9 月 15 日には成田市に分館が開館予定である。

陽明文庫

[京都市右京区宇多野上ノ谷町 1-2]

京都にある特別文庫。公家の名門で、五撰家の筆頭である「近衛家」伝来の古文書、典籍、記録、日記、書状、古美術品など約 20 万点に及ぶ資料を保管している。1938(昭和 13)年、当時の近衛家当主で、内閣総理大臣であった近衛文麿が京都市街地の北西、仁和寺の近くの現在地に設立した。近衛家の遠祖にあたる藤原道長(966 - 1028)の自筆日記『御堂関白記』(国宝)をはじめ、歴代近衛家当主の日記から、20 世紀の近衛文麿の関係資料まで、近衛家が応仁の乱などの戦乱を経て、1,000 年以上にわたり伝えてきた貴重な歴史資料を収蔵し、研究者に閲覧の便を図るとともに、『陽明叢書』として影印本の刊行などの事業を行なっている。ただし一般公開はしていない。

有三の没後、故人の遺志により近衛文麿関係蔵書は、陽明文庫へ寄贈された。

5 日本近代文学館の山本有三資料の調査

調査日：2006(平成 18)年 12 月 22 日

調査対象：日本近代文学館所蔵の山本有三資料

調査員：後藤孝教(館長)、二階健次(司書)、小川正子(司書)

山本有三の蔵書の一部は、日本近代文学館に寄贈されているため調査を行った。今回、文学館のご好意によって直接書庫に入らせていただくことができた。山本有三資料は地下書庫の一角にまとめて収蔵されていた。図書約 600 点が「寄贈資料台帳」に登録され、約 1,100 点は雑誌類であった。蔵書内容は、『近代文学研究叢書(光葉会)』『内外古今逸話文庫(博文館)』『日本歌学全書』『むそうあん物語(無想庵の会)』などの叢書とともに、氏自身の著作も『心に太陽を持って』等数点あった。文学書をはじめ社会科学書も少なからずあり、氏の関心領域の広さが改めてあらためて確認できた。これら山本有三資料は、成田分館に移送する予定とのことである。

第2部 山本有三文庫の蔵書構成調査及び山本 有三自身による書き込み本の調査

蔵書はその所有者の「知の証し」である。残された蔵書から、生前その人が何に関心を寄せ、どんな資料を読み、人生を生きてきたのか、探求することは可能である。特に山本有三のように文豪ともなればその蔵書も膨大であり、氏の人生観や文学形成の手がかりが残されていると予想される。

山本有三の蔵書は、都立多摩図書館、日本近代文学館、陽明文庫に分散管理されているが、陽明文庫は「近衛文麿」関係を、日本近代文学館はその数も少ないことから、当館の山本有三文庫が氏の蔵書の多くを管理し、山本有三の世界を残していることになる。従って、当文庫の蔵書構成の調査から有意な分析が可能であると思われる。

そこで、山本有三はどのような資料を使って作品を完成させたのか、どのような思いを結実させようとして調査研究に励んだのか、考察してみた。

1 文庫図書の蔵書構成調査

調査期間：2006（平成18）年4月～2007（平成19）年2月

調査対象：都立多摩図書館所蔵の山本有三文庫図書

調査員：二階健次（司書）、小川正子（司書）

(1) 文庫図書全体の蔵書構成比

まず、文庫全体の図書の蔵書構成比を調査した。和装本は除いた。従って文庫全体の80%程度が調査対象となった、と思われる。調査方法は文庫の書架から直接背表紙のキーワードを拾い出しカウントする方式と蔵書検索のキーワードからカウントする方式の両方を併用させた。この調査結果は以下のとおりである。

最も多いのが文学書で全体の38%であった。冊数でいえば約5,000冊。文学論、小説が中心で、詩、短歌、俳句は少ない。

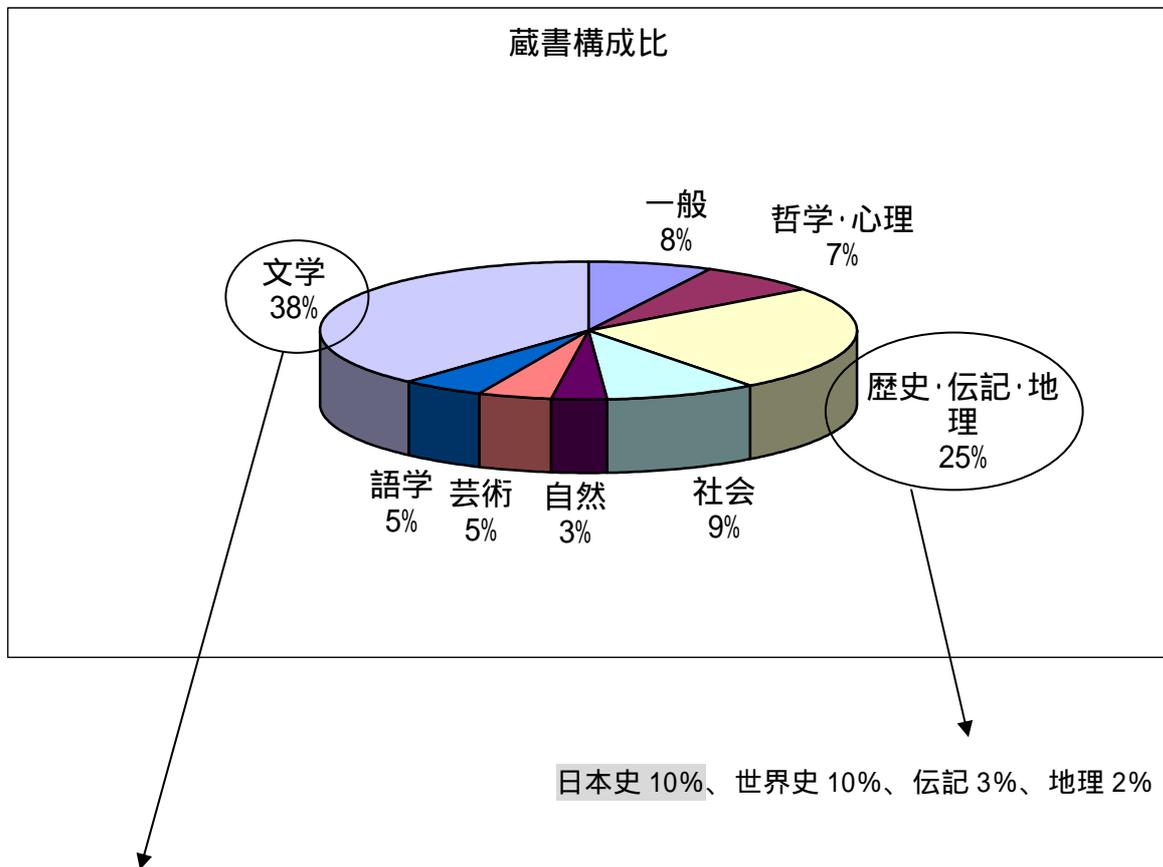
外国文学は11%であった。ドイツ、英米文学が中心である。

次に多いのが歴史書で全体の20%であった。内訳は日本史10%、世界史10%である。日本史は古代と幕末期の資料が充実している。専門家しか読まないような専門書が多くある。こうした本は今でもよく閲覧されている。世界史は中国史が多く、西洋史は少ない。

社会科学書は9%であった。社会主義などの思想関係の本もある。

言語関係は5%であった。国語学が充実している。

芸術関係は5%であった。演劇が充実している。文化・風俗に関するものもある。
 地理・地誌関係は2%であった。京都、奈良方面が充実している。
 趣味・娯楽的な本は少ない。
 全集、叢書物が充実している。



文学一般・日本文学 27%、外国文学 11%

【注】 山本有三文庫図書の分類は図書館の都立図書館データベースの一般資料に同定されたもの以外は今回の調査にあたって調査員が便宜上付して集計した。

(2) 文庫の代表的図書 (文庫探訪その1)

【資料1: 調査のための基本図書類】

- 『新校群書類従』 内外書籍
- 『続群書類従』 続群書類従完成会
- 『続々群書類従』 国書刊行会
- 『大日本古記録』 岩波書店
- 『大日本古文書』 東京帝国大学
- 『大日本史』 大日本雄弁会
- 『史籍集覧』 近藤活版所
- 『日本の歴史』 中央公論社

『日本の歴史』 読売新聞社

- 『日本歴史大辞典』 河出書房
- 『本朝通鑑』 国書刊行会
- 『帝国文庫』 博文館
- 『国史大系』 吉川弘文館
- 『古事類苑』 神宮司庁

【資料2: 上代・古代の調査研究書】
 書名に「上代」を持つ本24冊

書名に「古代～」を持つ本70冊
 書名に「日本古代史」を持つ本12冊
 書名に「日本神話」を持つ本11冊
 『近衛家書類』 日本史籍協会
 『壬申の乱(亀田隆之)』 至文堂
 『壬申の乱(直木孝次郎)』 塙書房
 『研究史壬申の乱』 吉川弘文館
 『大化の改新(北山茂夫)』 岩波書店
 『大化の改新(倉田百三)』 紀元社
 『大化の改新(井上光貞)』 要書房
 『大化改新と鎌倉幕府の成立』 創文社
 『大化改新の研究』 至文堂
 『「大化改新」論』 徳間書店

【資料3:幕末の調査研究図書】

書名に「徳川」を持つ本60冊
 書名に「幕末」を持つ本32冊
 書名に「明治維新」を持つ本16冊
 『維新史料綱要』 維新史料編纂事務局
 『伊藤公全集』 同刊行会
 『岩倉具視関係文書』 日本史籍協会
 『大久保利通日記上・下』 日本史籍協会
 『大久保利通関係文書』 日本史籍協会
 『大隈重信関係文書』 日本史籍協会
 『海舟全集』 改造社
 『木戸孝允文書』 日本史籍協会
 『奇兵隊日記』 日本史籍協会
 『公爵山県有朋伝』 同記念事業会
 『西郷隆盛伝』 同刊行会
 『坂本龍馬関係文書』 日本史籍協会
 『薩藩出群戦状』 日本史籍協会
 『高野長英全集』 同刊行会
 『武市瑞山関係文書』 日本史籍協会
 『武田耕雲齋詳伝』 水戸水戸学精神作興会
 『谷干城遺稿』 靖献社
 『大西郷全集』 平凡社

『米沢藩戊辰文書』 日本史籍協会
 『西周全集』 宗高書房
 『伯爵後藤象二郎』 富山房
 『松平春嶽全集』 三秀社
 『真木和泉遺文』 伯爵有馬家修史所
 『水戸藩史料』 吉川弘文館
 『横井小楠伝』 日新書院
 『吉田松陰全集』 岩波書店
 『吉田東洋遺稿』 日本史籍協会

【資料4:地理・風俗】

書名に「奈良」を持つ本22冊
 書名に「万葉」を持つ本170冊
 書名に「大和」を持つ本26冊
 『図説世界文化史大系』 角川書店
 『大日本地誌大系』 雄山閣
 『大日本名所図会』 同刊行会
 『日本地理大系』 改造社
 『日本地理風俗大系』 新光社
 『幕末明治文化変遷史』 東洋文化協会
 『講座 日本風俗史』 雄山閣

【資料5:国語学】

書名に「言語」を持つ本90冊
 書名に「日本語」を持つ本71冊
 『国立国語研究所年報』 昭和24～42年版
 『国語年鑑』 昭和29～48年版 秀英出版
 『日本言語地図』 国立国語研究所
 『岩波講座 国語教育』 42冊 岩波書店

資料6:その他大型本・豪華本】

『大武鑑』 大洽社
 『太平御覧』 国書刊行会
 『正倉院宝物』 朝日新聞社
 『正倉院宝物染織』 朝日新聞社
 『近世錦絵世相史』 平凡社

(3) 蔵書が語る山本有三の思い

調査結果から以下のようなことが分析できる。

山本有三は文学者であるから、文学分野が圧倒的に多かったのは予想どおりであった。氏が独自の文学観を形成し、戯曲や小説等の作品を書くにあたって、他の文学者をよく研究し、調査した氏の勤勉ぶりを裏付けるものである

歴史書が多く、特に「古代」と「幕末・明治維新」期のものが充実している。氏は若い頃、『坂崎出羽守』『西郷と大久保』等の歴史ものをテーマに戯曲作品を書いているこ

とから、「歴史」そのものに文学の拠り所を求めていたことがわかる。さらに、『海彦山彦』等「古代」をテーマに戯曲作品を残しており、「古代史」にも造詣が深かったことを物語っている

国会議員の経歴を持ち、「社会」への関心が高かった。『真実一路』『路傍の石』等に代表される少年を扱った小説では、家族、因習、社会体制の重圧に屈しないで生きていく強い精神力、向上心をテーマに描いていることから、少年の精神形成に影響を与える「社会」というものを強く意識していた。

氏は戯曲から出発した小説家であったから、平易な国語や会話体を使用して創作活動を進めた。国会議員としても国語運動に取り組み、特に当用漢字の普及に努めた。自宅を国立国語研究所の分室に開放し、強い問題意識を持っていた。国語学関係が充実しているのは特筆されるべきである。

風俗に関する書籍も多い。地理では「京都」「奈良」「飛鳥」など関西地方が多い。これは、国会議員を勤めあげた後、盛んに関西旅行に行ったようで、京都、奈良などの地誌関係の書籍も関西地方の調査研究の成果であった、と思われる。

氏の文学作品や社会的活動と残された蔵書とはこのように密接に関連づけられているのである。

2 山本有三自身による書き込み本の調査 (文庫探訪その 2)

山本有三をもっとよく知るには単に、どの分野にどのくらい蔵書があったかという計量的な調査だけでは不十分である。具体的に氏がどの本を手にし、どこから知識を吸収したのか、調べる必要がある。このことについて、次のような手がかりを見つけた。

『いいものを少し(永井朋子著 1998.3)』という本で、山本有三の長女である著者が、生前の氏のエピソードをまとめたものである。その 128p に「本に線を引く」という一文がある。

「大事な個所には傍線をつけたり、上に二重線を引いたりしておくのが父の習慣だった。父が眼を通してどうかは、その線の有無ですぐにわかった」

我々も、文庫資料のいくつかに「書き込み」があることはレファレンスや資料補修の業務の傍ら知り得ていた。それも、多数発見されるようになり、書き込みを調べれば氏の思いや文学形成の足跡の具体的裏付けとなるのではないかと話し合っていた。しかし、系統的に書き込みを見つけるとなると難しい。書き込みの有無は都立図書館データベースや書籍の外観から全くわからないからである。そこで、これまで見つけた書き込み本のほかにさらに調査を進めるにはどうすればよいか、検討した。

まず氏の文学遍歴を調べ、そこから書籍を特定し、書き込みを発見できないか考え、調査してみることにした。氏は大変な勉強家であり、しかも几帳面であったから必ず発見できるはずであった。その結果いくつかの本に、予想が的中した。さらに、書き込み状況を調べると、三パターンあることも解った。

それは、重要と思った箇所に「傍線」を引いたり、「、」や「」を字の横に付しているもの。自分の覚えのために単語や文章の書き込みをしているもの。出版後に仮名遣いなど全編、細部にわたって訂正したもの、などに分けられる。

(1) 文学的視点形成に影響を与えた本

まず、氏の文学的視点形成に影響を与えたと考えられる本の書き込みを調査した。調査にあたっては早川正信著『山本有三の世界 比較文学的研究』（和泉書院）を参考にした。本書には、当館の『山本はな・有一氏寄贈リスト』の冊子から書き込み本に着目したことが触れている。なお、本文中の【注】は『集英社世界文学事典』（集英社 2002）『改訂増補新潮世界文学辞典』（新潮社 1990）を参考にした。

(ア) 『六世菊五郎百話』（〔尾上菊五郎述 右文社 1948〕（Y11742：以下のY記号は、山本有三文庫資料を整理した際の個別番号である））には有三が全編にわたって「 」「傍線」の書き込みがある。この本の書き込みは、次のような氏の文学観と関連している。

本書は六代目菊五郎の芸談を書き留めたものである。六代目菊五郎が戯曲『坂崎出羽守』に出演したときの話が掲載されている。六代目菊五郎は「坂崎は自分だ」と何度も言ったそうである。

主演の菊五郎は、本読みのときから、「出羽守はあっしだよ」と言っていたようであり、出羽守に成りきって演じ、二幕目の幕切れでト書きと違う演技もしたが、有三はかえって自身の作品を菊五郎の演技に合わせて直した。

有三自身が「私は年中あせってハマばかりやっている。いや私がそうだから坂崎をそういう人間に解釈したのかもしれない。とにかく、私には坂崎が他人でないようになってきた。私は坂崎の中に自分を見いだすとともに、自分を坂崎の中に投げかけた」と書き残している。氏にとってはじめての史劇だが、「平凡な人物もその中に普遍性を持っていれば、史劇の主人公たり得る」という氏の信念が生んだ作品であったといえることができる。

(イ) 『シッダルト（海外文学新選）』（ヘルマン・ヘッセ著 新潮社 1925）（Y4620）も、有三氏が全編にわたって、「 」「傍線」の書き込みがある。この本は次のような氏の文学観と関連している。

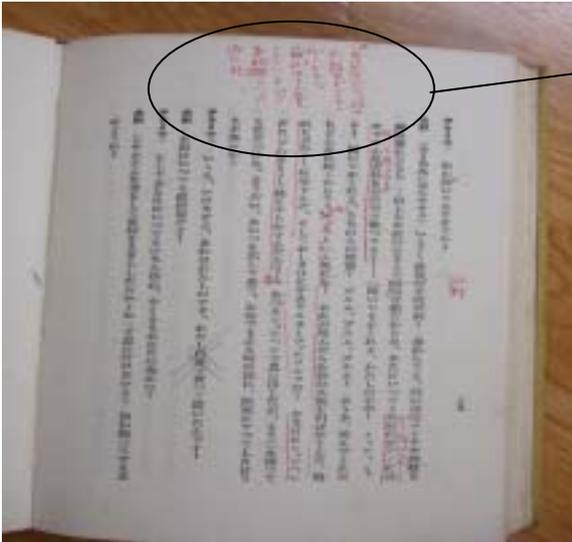
『路傍の石』はヘルマン・ヘッセ^{注1}の影響の下に書かれている。氏の分身である相川吾一少年の苦悩はシッダルトの苦悩に通じている。自らの運命を自覚し、静かに自己を見つめ、しかしその中で力一杯生き、一步一步向上しようとする吾一少年と重なり合う。「貧困の中で必死に身を立てようとするれば、人間はそこから生まれる内面の苦しみや喜びを味わう。このことは人間が社会生活を向上改善していくための努力とは別の、生きるための必須条件なのである」という氏の文学観を形成した。

【注1】 ヘルマン・ヘッセ（1877～1962）。ドイツの叙情詩人、小説家。コスモポリタンの平和主義者で東洋の宗教への関心が高かった。代表作は主人公が無理解な教育の下敷きになって破滅する『車輪の下』、仏教的解脱の秘密を探った『シッダルト』等。1946年にノーベル文学賞受賞。

(2) 文学作品の完成に影響を与えた本

次に、氏の文学作品に影響を与えたと考えられる本の書き込みを調査した。

(ア)『ストリンドベルク戯曲全集』(三井光弥訳 新潮社, 1926)(Y5648)のp144~375に収載されている『死の舞踏』に、赤ボールペンでの加筆訂正があり、自分流に翻訳した形跡が残っている。



この版には「ああ、死んでくれたらどんなに嬉しかろう！」……という風にな！おれが死んだらお祝の太鼓を引っぱたくんだ、喇叭(ラッパ)をぶかぶか吹鳴らすんだ、そして、おしまひにやアルカーツァルワルツだ！おまけにシャンペンガロップのきりきり舞をやらかすんだろう！」とあるが、この文の上部に有三は赤字で次のように訂正をしている。

「あれが死んだら祝の太鼓をドンチャレドンチャレ。最後(はて)はアルカザルワルツにシャンペン 曲といった風にね。」

また、文庫には『ストリンドベルク全集』『ストリンドベルク小説全集』『ストリンドベルク戯曲全集』など20冊がある。

氏の初期の戯曲作品は、多くストリンドベリ^{注2}から吸収している。

【注2】 ユーアン・アウグスト・ストリンドベリ(1849~1912)。スウェーデンの劇作家。ストックホルムに生まれる。浪漫家で理想主義者であった。自我のあくなき追求、懐疑と不信のあとの光明と不動をその戯曲作品に表した。現代劇、歴史劇、童話劇、祝祭劇等幅広い。代表作は『ダマスクスへ』3部作、『死の舞踏』等。

(イ)文庫には『芥川龍之介全集』など芥川作品が19冊、『シュニッツラー短編全集』『シュニッツラー選集』など18冊が文庫にある。

戯曲『女親』は、芥川龍之介やシュニッツラー^{注3}の影響の下で書かれた。

【注3】 アルトゥール・シュニッツラー(1862~1931)。オーストリアの作家。ウィーンに生まれる。精神分析医でもあり、フロイトと交流があった。文学史では「若きウィーン派」に属し、「自然主義」派と対峙する。作風は人間の生と死に冷厳な目を向け、魂や人間衝動の世界に鋭いメスを入れている。代表作は『輪舞』『令嬢エルゼ』等。森鷗外の翻訳がある。

(ウ)『研究社英米文学評伝叢書』が93冊文庫にある。その65巻は『メリディス』(松浦嘉一著 研究社出版 1980)(Y2495)で、p28~113(小説に関する記述)に鉛筆による下線、書き込みがある。



メリディスに氏の文学観と近いものを感じとっていた。

『真実一路』は複雑な家庭の大人の内紛と少年の持つ変わらぬ純粋な心^{注4}が対比されながら描いており、メリディスから影響を受けたと考えられている。

【注4】 ジョージ・メリディス(1828～1909)。イギリスの詩人、小説家。イングランド南部ポーツマスに生まれる。不幸な自己の体験を基にした『リチャード・フェヴェレルの試練』、政治小説『ピーチャムの生涯』とともに人間のエゴイズムを鋭く暴いた『悲劇的喜劇役者』などの戯曲作品がある。夏目漱石にも影響を与えた。

(エ)『ある女の24時間』(Y254)など7冊のツヴァイクの著作が文庫にある。

『無事の人』はシュテファン・ツヴァイク^{注5}の影響を受けている。

【注5】 シュテファン・ツヴァイク(1881～1942)。オーストリアの作家。ウィーンに生まれる。詩人として出発、小説、戯曲、評論を書く。フロイトと親交があり、その心理学を援用した小説を書く。『三人の巨匠』『マリー・アントワネット』等の伝記小説、歴史教育家、平和主義者としての信条を發揮した『昨日の世界』『ヨーロッパの遺産』等の評論集、『エレミア』等の戯曲がある。小説『変身の魅惑』は国家のあり方を問う問題作といわれている。

(3) その他の書き込み本

山本有三の文学観と密接に関係した図書の調査は以上であるが、氏がその時々^のの読書や研究から関心を示し、書き込まれたと思われる本のうち、これまでの業務や今回の調査から発見できた図書ものを次にリストアップした。

重要と思った箇所に「傍線」を引いたり、「、」や「 」を字の横に付したもの

書名・著者・出版社・出版年	個別番号
犬と狼 / 平岩米吉著 / 日新書院, 1942 (自然観察叢書)	Y464
江戸時代の農民生活 / 児玉幸多著 / 大八洲出版, 1948 (大八洲史書)	Y704
ガリヴァ旅行記 / ジョナサン・スウィフト著 / 壮文社, 1947	Y1407
河井継之助伝 / 今泉鐸次郎著・増補改版 / 目黒書店, 1931	Y1417
狐・狸・靈魂 / 西他石著 / ベスト・セラ-社, 1959 (ダイゼスト文庫)	Y1661
新国会選挙大観 / 朝日新聞社編 / 朝日新聞社, 1947 *初代参議院議員に氏自身も掲載され赤丸を付す。その他基準は不明だが、赤で丸×を付す	Y5296
猫性語録 / 豊島与志雄著 / 作品社, 1938 (作品文庫)	Y9415
緑風会十八年史 / 野島貞一郎編集 / 緑風会史編纂委員会, 1971	Y11623
頓要集 / 古典保存会, 1934 (古典保存会叢書)	Y13089
国語音韻論 / 金田一京助著 / 刀江書院, 1935	Y3409

国語学概論 / 橋本進吉著 / 岩波書店 , 1946	Y3418
国語尊重の根本義 / 山田孝雄著 / 白水社 , 1938	Y3460
銀婚式 / ポール・ジェラルディイ著 / 新潮社 , 1925 (現代仏蘭西文芸叢書)	Y1845
近世世相史概観 / 斎藤隆三著 / 創元社 , 1940	Y1889
金閣寺 / 三島由紀夫[著] / 新潮社 , 1977	Y1838

自分の覚えのために単語や文章の書き込みをしたもの

書名・著者・出版社・出版年	個別番号
義人田中正造翁 / 柴田三郎著 / 敬文館 , 1913 * 例 : p32 の「翁の妻君は・・・」の文の上部に「自由結婚」と書き込みあり	Y1632
奇兵隊史録 / 平尾道雄著 / 河出書房 , 1944 * 例 : p65 の「高杉の奇兵隊総管在任は・・・」の文の上部に「在任ワズカニ三カ月」と書き込みあり	Y1690
近世探検史 / 小牧実繁著 / 日本放送出版協会 , 1940 (ラジオ新書) * 例 : p4 の「黄金の島日本は、近世・・・」の文を含む文節に横傍線を付し、上部に「日本が近世史発展の為ノ元動力(原文のママ)」と書き込みあり	Y1890
頼山陽及其時代/森田文蔵著/民友社 , 1898 * 例 : p34 の「雲那山那」の言葉に横傍線を付し、上部に「庸少ニシテ、広く知ラレン 詩 雲那山那」と書き込みあり	Y11507
ふりがな廃止論とその批判/白水社, 1938 * 例 : p 394-395 に「記紀の歌の表記法」と書き込みあり	Y10098
現代かなづかいの意義/文部省, 1952 * 例 : 表紙に「保存」と書き込みあり。p 6-7 にも傍線や書き込みあり	Y2609

出版後に仮名遣いなど、全編、細部にわたって訂正したもの

書名・著者・出版社・出版年	個別番号
女の一生 ; 下巻 / 山本有三著 / 新潮社 , 1947 (山本有三文庫) * 出版された版に対し p18 では、句点を打ち直したり、「こういうのだ」を「こう言うのだ」と漢字にしたり、「どうしても気がすすまなかった」を「どうもそうすることに気がしなかった」と訂正している。訂正は随所に及んでいる。	Y1087
真実一路 / 山本有三著 / 新潮社 , 1949 (山本有三文庫) * p148 では「このあいだもいったように」を「言ったように」と漢字に直し、「一体」は逆に「いったい」と平仮名に直している。「どかん」は「ドカン」とカタカナ書きに直している。こうした訂正は随所に及んでいる。	Y5306
真実一路 / 山本有三著 / 新潮社 , 1942 * p 244 の「その時木立の蔭」を「陰」と直し、文の上部に「コレマデハ陰ガ用ヒラレテイタ。統一スベキカ」と書き込みがある。こうした例は随所に及んでいる。	Y5308

第3部 文庫雑誌の蔵書構成調査及び山本有三自身による書き込み雑誌の調査

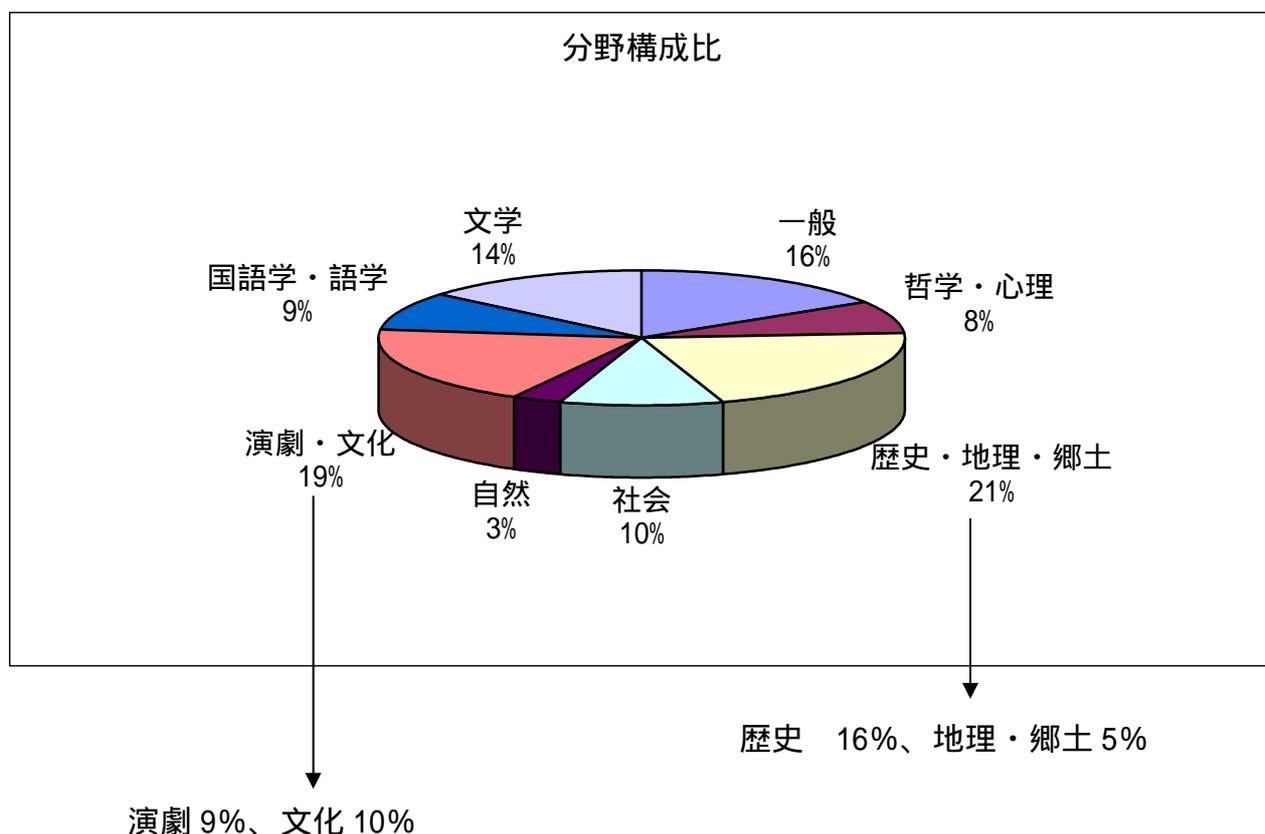
1 文庫雑誌タイトルの分野構成比

調査期間：2006（平成18）年11月～2007（平成19）年2月

調査対象：都立多摩図書館所蔵の山本有三文庫雑誌

調査員：二階健次（司書）

山本有三文庫の雑誌は、明治、大正、昭和にわたる歴史、文学、国語・国文学そして氏の郷里である栃木の雑誌が中心となって構成されている。今回は図書と同様『山本はな・有一氏寄贈リスト』の冊子にある雑誌リスト一覧を使ってタイトル別に分類し、分野構成比を調査した。これによって有三の関心の高かった分野が調査できた。結果は次のとおりであった。



【注】 山本有三文庫雑誌の分類は、今回の調査にあたって調査員が便宜上付して集計した。

この調査結果は次のようにまとめることができる。

歴史関係が16%と最も多い

次いで文学関係が14%、演劇、国語学の9%と続く

社会科学系雑誌や演劇・文化系などは図書と同傾向を示している

2 企画展示「山本有三文庫の雑誌たち」

都立多摩図書館では2005（平成17）年度の企画展示で「山本有三文庫の雑誌たち」展を開催した。その展示に向けて文庫雑誌の調査を行った。

展示期間：2006（平成18）年2月7日～3月16日

展示担当：堀合儀子（司書）、鈴木恵子（司書）



展示構成

所蔵雑誌からみる作品

- ア 幕末期の資料
- イ 上代の資料
- ウ 個人伝記の資料

国語・国文の資料から

郷里、栃木の資料から

貴重な雑誌数種

個人の伝記

氏は歴史の変革期にあって、時代を先取りした見識の高い人物を主人公にした作品を書くために、個人の伝記関係の雑誌を収集している。

< 展示例 >

- ・小説『濁流』のモデル近衛文麿：『小説読物街』 昭和24年12月号、昭和25年1月号 高島屋出版部
- ・戯曲『西郷と大久保』の主人公西郷隆盛：『日本及日本人』 542号（明治43年9月臨時増刊）
- ・頼山陽と田能村竹田：『山陽と竹田』 山陽会

その他『長崎談叢』藤木博英社、『土佐史檀』土佐史檀会、『防長史談会雑誌』防長史談会、『史談速記録』史談速記録など

日本古代史

昭和20年代、氏は直木孝次郎^注と親交を持ち、日本の古代史の舞台をめぐる旅に出かけている。

【注】 1919（大正8）年生、兵庫県神戸市出身。日本古代史が専門の歴史学者で大阪市立大学名誉教授。『日本古代国家の構造』（青木書店 1958）、『持統天皇』（吉川弘文館 1960）、『壬申の乱』（塙書房 1961）などの専門書とともに、『古代遺跡見学 奈良・大阪・京都・滋賀（岩波ジュニア新書）』（岩波書店 1986）、『法隆寺の里 わたしの斑鳩巡礼』（旺文社 1984）などの案内書の著作もある。

< 展示例 >

『続日本紀研究』続日本紀研究会、『古代』早稲田大学考古学会、『古代学』古代学協会、『古代文化』古代学協会、

国語・国文学

氏は平明な言葉づかい運動の国語改革者であり、議員活動を通じても日本の文化発展の観点から生涯をかけて取り組んだ。

< 展示例 >

『国語国字』国語問題協議会、『国語国文』星野書店、『国語と国文学』至文堂、『言語生活』筑摩書房、『言語政策』言語政策の会

郷土雑誌

氏の故郷は現在の栃木県栃木市である。郷土に対する深い愛着ぶりがわかる。

< 展示例 >

『うづ乃宮』二荒山神社社務所、『月刊とちぎ』下野新聞社、『下野史談』下野史談会、『下野史料』下野史料保存会、

貴重雑誌

『京都消防』京都市消防局は3巻8号1冊しかないが、金閣寺炎上が特集。『白樺』洛陽社は明治43年9月の創刊号。

3 山本有三自身による書き込み雑誌の調査

調査期間：2006（平成18）年12月～2007（平成19）年1月

調査対象：都立多摩図書館所蔵の山本有三文庫雑誌

調査員：二階健次（司書） 小川正子（司書） 鈴木恵子（司書）

図書と同様雑誌についても有三は書き込みを行っている。今回の調査は系統的、網羅的に行ったものではなく、展示会や資料の補修等で気が付いた際に記録しておいたものである。今後、雑誌の書き込み調査を進めれば、思わぬ新発見に出会う可能性がある。

雑誌名・巻・号・出版年・出版社・頁	「 」及び傍線の書き込みがある論文
史談会速記録 / 第258輯 / 1914(大正3) / 史学会 / p. 22 ~ 32	「坂本龍馬殺害の真相並殺害者に就て」
国語文化 / 3巻1号 / 1943(昭和18)年1月 / 育英書院 / p. 32	「表現の様式」
国語国文 / 34巻5号 / 1950(昭和25)年10月 / 京大 /	「古事記に於ける神話統合の理念」
国語運動 / 1巻1号 / 1937(昭和12)年8月 / 国語協会 / p. 68	「国字国文の移り変わり」
国語学 / 第5輯 / 1951(昭和26)年2月 / 刀江書院	「日本語の系譜について」「日本語の系統について」
國學院大學日本文化研究所紀要 / 第16輯 / 1965(昭和40)年3月	最初の3論文
国語 / 27号 / 1940(昭和25)年1月 / 岩波書店 / p. 36	「聖書和訳と国語問題」

第4部 山本有三・二つのライフワーク

山本有三の戦後活動、それは自らライフワークとする課題へ取り組むことであった。その課題は二つあった。

一つは、戦前戦後を通じて情熱を傾注してきた国民の国語運動である。氏は1946（昭和21）年5月の貴族院議員就任から1953（昭和28）年5月の参議院議員任期満了まで7年間議員活動を続け、当用漢字や現代かなづかい制定に尽力した。

もう一つは学生時代から交流の続いていた「近衛文^注」である。近衛文^注は、1937（昭和12）年～1941（昭和16）年の戦争突入間近まで三次にわたって内閣の首相を務めた。有三は1939（昭和14）年に近衛自身から「自分の伝記を書いてほしい」と直接依頼を受けている。そして、29年後の1973（昭和48）年4月4日付けの『毎日新聞』に伝記『濁流』の連載を始めたが、氏の死去で中断している。氏は戦後活動の28年間に文学作品は未完も含め2つ（『無事の人』『濁流（未完）』）しか残さなかった。しかし、近衛の調査は生涯をかけて続けたのである。調査にも余念がなかった。構想を温め、十分時間をかけて練りに練った。

【注】 1891（明治24）年～1945（昭和20）年。近衛家は五撰家筆頭の家柄。1937（昭和12）年第1次近衛内閣を組閣したが同年盧溝橋事件が勃発、日中戦争に突入した。以後終戦まで三次の内閣を組閣したが戦争責任をとって悲劇的な最後を遂げた。死の直前に山本有三とも会っている。

1 山本有三と国語運動（文庫探訪その3）

(1) 国語運動への情熱

蔵書構成調査で文学、歴史とともに柱の一つとなっているものが、「国語学」「言語学」の分野であることがわかった【7pの資料5】。

氏が生涯をかけて取り組んだ国民の国語運動とは、「日本文化として平明な国語の普及に努め、当用漢字、現代かなづかいを制定することであった。氏は、自邸を国立国語研究所^注に提供するなど国語改革の先駆者であった。

【注】現在は、独立行政法人国立国語研究所として都下立川市緑町に移転してきて、当館も言語コーパスなどのデータベース作成に資料提供などで協力している。

- ・1945（昭和20）年：自ら邸内に「三鷹国語研究所」を設立
- ・1946（昭和21）年：国語審議会委員、貴族院議員に勅撰、「国民の国語運動連盟」結成
- ・1947（昭和22）年：参議院議員の選挙で当選
- ・1948（昭和23）年：「国立国語研究所」の設立に尽力
- ・1951（昭和26）年：自邸を「国立国語研究所分室」に提供
- ・1953（昭和28）年：参議院議員任期満了

(2) 当用漢字制定への尽力

「当用漢字」は「漢字の全廃を目的に全廃まで「当面使用できる」ものとして1,850字に制限し、新体字を採用した漢字」のことである。1946(昭和21)年11月に内閣告示・訓令された。これにより、使用頻度の低い漢字は廃止され、法令、公文書、新聞、雑誌のメディアなど一般社会が用いるべき漢字の範囲が示された。当用漢字が使えない場合は、かな表記するとされ「ませ書き」表記となった。この「当用漢字」と命名したのは山本有三である。

「現代かなづかい」は、「歴史的仮名遣い」を改めて表音式に近づけたもので、当用漢字とともに内閣告示・訓令された。

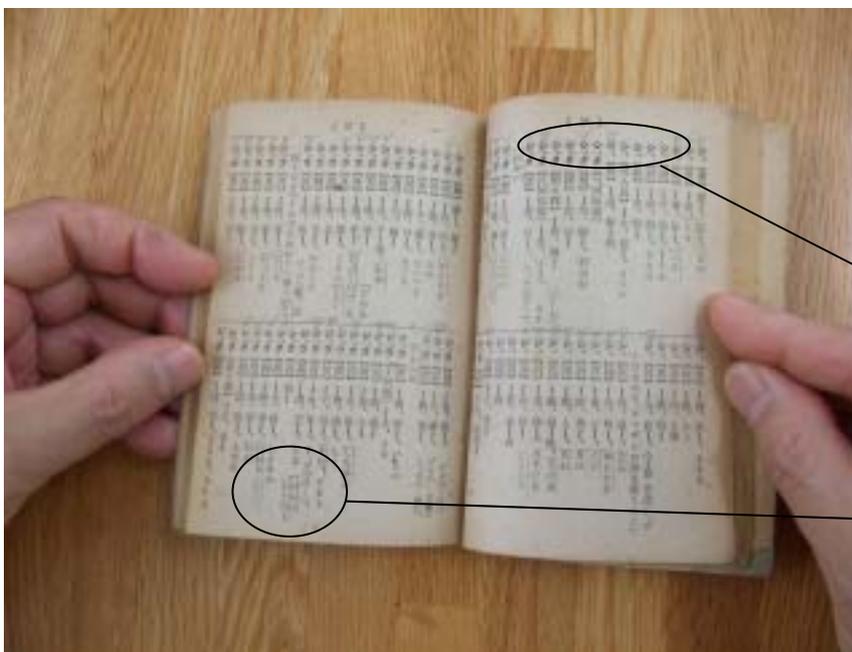
11月に公布された「日本国憲法」は口語体、当用漢字を使用している。

この「当用漢字」と「現代かなづかい」が告示されたことで、日本語の表記基準は大きな転換点を迎えた。社会的にも議論が起こり、各々の立場が鋭く対立することになった。例えば、福田恒存はこの国語・国字改革に対し、1955(昭和30)年～1956(昭和31)年にかけて金田一京助と論争し、改革の不合理性を指摘した。その著『私の国語教室』(新潮社 1960)では「歴史的仮名遣い」を勧めている。

この論争は現代においても決着がついていない。作家の丸谷オーなどは、これまで国が進めた国語改革に反対し、現在もふりがなと歴史的仮名遣いを使用しようと主張する一人である。その著『輝く日の宮』(講談社 2003年)では当用漢字以外の漢字を多用し、ルビをふっている。

山本有三は、戦前から『ふりがな廃止論とその批判』などで国語問題に深い関心を示したが、一貫して平易なかなづかい、表音主義の立場であった。氏は作品『戦争と二人の婦人』の執筆に際し、あえて漢字にふりがなを使わずに書き進めるために漢字・かなの文字をどのように使用したか、その考えを本のあとがきで述べた。氏は法律など、国民が日常知っていなければならない文章は、漢字を少なくし、もっと分かりやすくしなければならない、と主張した。この信念が、戦後、憲法の口語化など国語改革の先頭に立ち、現代かなづかいや当用漢字の制定に尽力したエネルギーとなっていった。その熱意は文庫の国語学関係の本に、氏自身による書き込みがあることから伝わってくる。

『当用漢字と現代かなづかい』(ミタカ国語研究所編 三省堂出版 1946年)(Y7394)



ア 表紙に「無事の人」使用漢字、と書き込みがある。

イ 文中も記号や文字の書き込みがぎっしりある。

チェック

書き込み

『国語改革論争』（小野昇編 くろしお出版 1969年刊）(Y3412)

著名な作家、評論家、文化人の主張を1冊にまとめたもの。氏は以下の論者の主張に印を付している。賛成、反対それぞれの立場の意見をよく研究したと思われる。

- ・「国語よ、どこへ行く」（福田恒存：評論家、翻訳家でシェークスピアを翻訳）
- ・「漢文訓読法を捨てよう」（山形直：中国語研究者、中国語学研究会会員）
- ・「日本語の表記法について」（森恭三：ジャーナリスト、朝日新聞論説主幹）
- ・「国語表音化の必然性」（土岐善麿：歌人、国語審議会会長、ローマ字運動を推進）
- ・「国語表音化への疑問」（太田青丘：歌人、漢詩の歌風が特徴）

2 山本有三と「近衛文麿」研究（文庫探訪その4）

山本有三が近衛文麿を生涯忘れ得なかったことは、氏が1944（昭和19）年1月8日に近衛自身から「伝記を書いてくれ」と依頼を受けてから調査を積み重ね、80歳を越した老体に鞭打って遂に1973（昭和48）年4月4日の『毎日新聞』から連載を始めるまでの実に29年間を費やしたことから想像がつく。1949（昭和24）年に書いた『無事の人』から数えても24年間の空白を経て書き始めたのである。近衛文麿を氏自身の白鳥の歌と考えたのにはそれ相応の思いがあったからである。氏はどのような構想の道筋を考え、歴大な時間を使ったのか。氏はもともと、ある事件への関心が向くと、それをそのまま書くのではなく、よく素材を調査し、自己の心情や理念を十分練って、主人公に投影していくという方法をこれまでもとってきた。近衛の伝記執筆にあたっては特に万全を期した。このため、近衛から派生する様々な問題を根気よく丁寧に解決していった。この慎重な姿勢こそが様々な方向に問題が展開する結果を生んだのではないかと考えられる。

「近衛文麿」を軸に、そこから展開した調査研究がどのようなものであったのか、文庫の蔵書構成が語りかけるものを分析してみた。

(1) 近衛文麿との関係

近衛と有三の関係は、『いいものを少し』P267に次のように書かれている。

「父は一高で近衛文麿公とご一緒だったが、近衛公は京大に、父は東大に進学したから、しばらくはおつき合いはなく、昭和十年ごろからかなり親しくおつき合いさせていただくようになったようで、昭和十四年八月には、雑誌『モダン日本』に、軽井沢の近衛公の別荘で対談した写真が載っており、その時に別荘の庭で写した写真も残っている」

「戦時中の昭和十九年に、近衛公が、自分の伝記を書いてくれるような人はいないか、と父に相談されたことから、そういうことなら自分が書くのがいちばんいいと判断して、「私が引き受けましょう」と申し出で、それ以来近衛公のことを調べに調べてきて、ようやく「濁流 雑談近衛文麿」と題して、毎日新聞に連載を始めたのは、昭和四十八年四月、話があってから三十年も経ってからのことだった」

また同書のp153に「近衛公の死と三鷹の家の接收」という題で、有三と死を覚悟した近衛との緊迫した場面も書かれている。

「その日は第一級戦争犯罪人として巣鴨拘置所に出頭が決まっていたので、前日の午後、父は荻窪のお宅に伺った。一高時代の同級生で近衛公の側近でもあった後藤隆之助さんもご一緒だった。夕刻に父と後藤さんと二人だけで近衛公にお目にかかったとき、父は近衛公が最後の決意を固めておられると推察し、質問したところ、近衛公は即座に「いいえ」と否定されたそうである」

この場面は『小説 読物街』1949（昭和24）年12月号掲載の「大長編小説 日本の遺書 近衛をめぐる昭和秘史（大宅壮一著）」の伊原宇三郎画の挿絵で再現されている（当館の企画展示「山本有三文庫の雑誌たち」でも紹介した）。また、本文のこの場面の記述には有三自身のものと思われる鉛筆線の書き込みもある。

このように近衛文麿と山本有三のつきあいは深かった。一高で同級であったというだけでなく、1935（昭和10）年頃から親しくつきあい、近衛ブレンといわれた。

近衛から「伝記を書いてくれ」と依頼を受け、約束を果たそうとしたのが、氏の絶筆となった『濁流 雑談 近衛文麿』である。この作品は、依頼を受けてから29年を経た構想であったが、毎日新聞の連載は近衛の出生、幼年時代に入ったところで、有三の死去により未完に終わってしまった。しかし、この29年間は、有三にとって近衛文麿の執筆のための醸成期間であった。氏は近衛文麿に直接入り込むのではなく、派生する様々な問題解決を整理してから本筋に入ろうとしていた。氏は、「何か大きな作品の構想を抱いていてそれを書こうとしていた」とか、「実に熱心に、根気よく古代史を調査研究していた」という話が残っている。また、京都や奈良を歴史学者直木孝二郎と旅行し、古都を巡り歩いている。これはすべて近衛文麿のライフワークから派生した調査であったのである。

(2) 近衛家のルーツへ

まず、有三は近衛文麿の調査研究過程で、近衛家の祖先である「藤原鎌足」に興味を持った。著者自身戯曲『海彦山彦』を書き、もともと古代史に関心が高いこともあったようだ。没後古代史に取材した作品のための創作ノートが残されている。

さらに、丸谷オーは雑誌『オール読物』2006（平成18）年1月号のp105「双六で東海道」の中で、森浩一の著作『森浩一、食った記録』にある次の一文を紹介している。

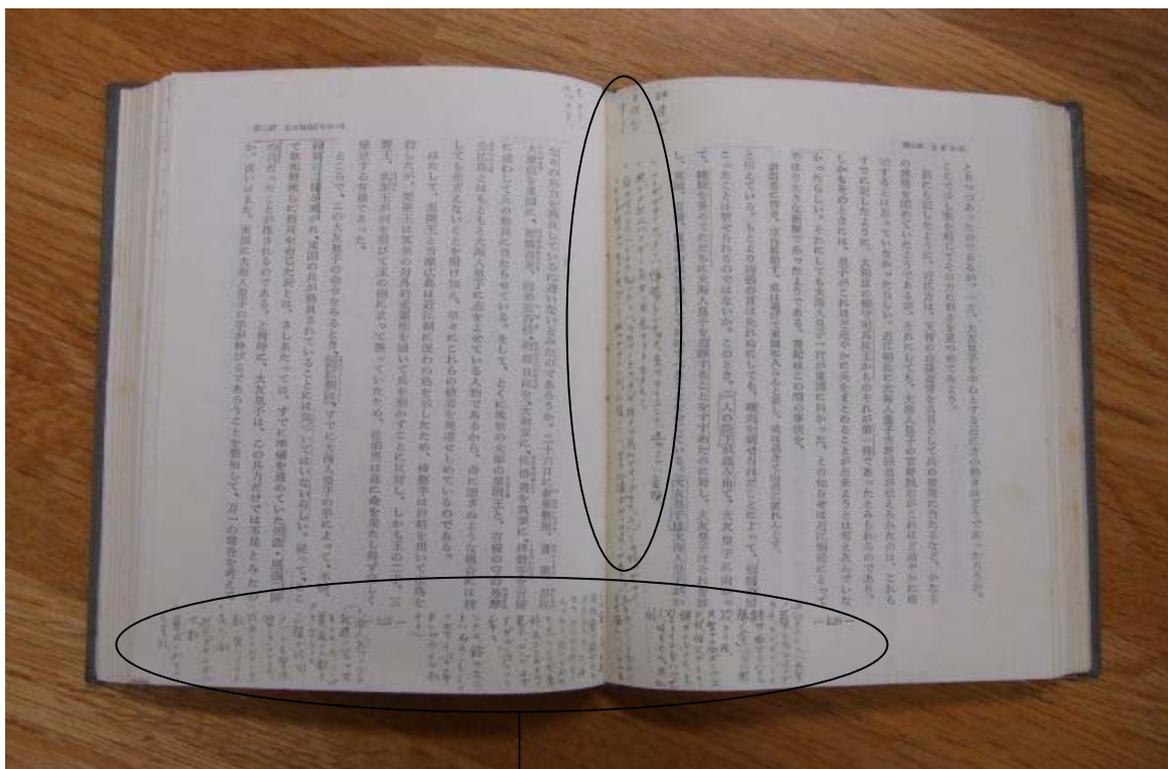
「山本有三さんとは、1965年に知り合った。突然に手紙をもらい、大阪の天王寺のホテルでお会いした。壬申の乱をテーマにした小説の構想をもっておられ、その関係の河内の土地勘をつけたいとのことだった」

このことから、氏は「壬申の乱をテーマにした小説」構想を持っていたことがわかる。藤原鎌足の「大化の改新」や「壬申の乱」への関心は近衛のルーツ探求から派生した成果だったのである。

(3) 「壬申の乱」への関心

「壬申の乱」から氏が学び取ったのは、人間の権力欲である。自分が権力を振っているように見えても、結局は権力の奴隷になっているという「権力者」の姿を描きたかったのだ、といわれている。当文庫の「壬申の乱」関係図書についてはすべてに書き込みがある。

『壬申の乱』(亀田隆之著 至文堂、1961)(Y5344)



全頁にわたってこのような書き込みがある。よく勉強した跡が伺える。

『壬申の乱』(直木孝次郎著 塙書房、1961)(Y5345)

全頁にわたって傍線の書き込みがある。さらに「第1章 皇位継承をめぐる」のp31~37にわたっては、上記と同じような書き込みが3カ所ある。

『研究史壬申の乱』(星野良作著 吉川弘文館、1973)(Y5346)
全頁にわたって傍線の書き込みがある。

『鬼道』(真殿咬著 みすず書房、1954)(Y1666)

4つの短編を集めた短編集で、その一つが『壬申の乱』である。文中の数カ所に傍線や「x」を鉛筆の書き込みがある。

「大化の改新」についても『大化の改新』(倉田百三著) 『大化改新論』など6冊が文庫にある。すべての本に、傍線の書き込みがある。【7pの資料2】

しかし、「壬申の乱」、「大化の改新」への関心は結局、作品に結実することはなかった。

(4) 幕末・明治維新への興味

さらに、近衛家は皇室とも深い関わりがあることから、氏は尊皇攘夷の「幕末」にも関心を強めた。氏自身も戯曲『西郷と大久保』などの著作があり、もともと幕末の人物誌や関係文書に関心を寄せていたため、調査対象が広がっていったと考えられる。

当文庫においても「幕末・明治維新」関係の蔵書数が多い。この分野は専門家レベルの調査資料が揃っている【7pの資料3】。

(5) 京都・奈良への調査旅行

「幕末」「近衛家」というテーマをさらに深めるために、氏は「京都、奈良の時代風俗、地勢」にも関心を深め、議員を辞めてからたびたび奈良をはじめとする関西方面を調査旅行した。文庫の中にある「地理」「風俗」「奈良」の書籍がよく揃っている【7pの資料4】。

(6) 文庫に残されている近衛文麿関係図書

山本有三が蔵書としていた近衛文麿関係の資料は陽明文庫に寄贈されたおり、当館の山本有三文庫には数点が残されている。

書名・著者・出版社・出版年	個別番号
近衛家伝来国宝大手鑑1、2、解説 / 近衛通隆監修 / 淡交社 , 1971	Y4044 ~ Y4046
友人近衛 / 有馬頼安寧著 / 弘文堂、1948 * 傍線の書き込みあり	Y11366
近衛家書類1、2/ 日本史籍協会、1919	Y4042 ~ Y4043
近衛新体制の全貌 / 小田俊与著/ 皇国日本新聞社、1940	Y4047

3 蔵書が語りかけるもの

蔵書というものは、所有者の関心のありかを示し、その人となりを表す。「書き入れ」の痕跡は、その本の所有者がどこを重要と考えたか、またその書き込みの文章により、何を想起したかを推理する興味を提供してくれる。それが、たとえ「傍線」や「、」「」であっても十分、所有者の思考過程を辿っていける糸口なのである。

少なくとも山本有三が生きた時代はそうであった。インターネット情報が飛び交う現代においては、有三のような形で蔵書を残しても、そこから所有者の思いや信念を伝えることはもはやできないかもしれない。小説でさえ、知らない者同士がインターネット上で作品化し合う時代なのである。

だからこそ、山本有三文庫が都立多摩図書館に保存されていることが意味を持つてくる。山本有三文庫はまさに明治・大正・昭和に生きた文豪の「知の集積」である。

今回の蔵書調査では、和装本調査や書き込み書籍の網羅的調査を行えなかった。また、有三が取り組んだ児童・青少年図書についても今後の調査を期したい。

最後に、山本有三は絶筆となった『濁流』は次の句で終わっている。

体内に燃ゆるものあり初あかり

この原稿をまとめるのにあたり、都立多摩図書館の後藤孝教館長をはじめ都立図書館の方から貴重なご助言をいただきましたことを感謝いたします。

第5部 山本有三関係情報

1 山本有三関係の記念館

山本有三ふるさと記念館

【栃木県栃木市万町 5-3 電話番号：0282-22-8805】

「山本有三記念会」は有三の業績を称え、顕彰することを目的に1986（昭和61年）に発足した。その後、栃木市民をはじめ、全国の有三ファンからの募金で、1997（平成9年）11月、栃木市の有三の生家だった建物（現在は理髪店）の隣に記念館が開館した。近くには有三の墓がある近龍寺がある。

記念館には有三の遺品や作品、研究資料があり、「路傍の石文学賞^注作品」も読める。

【注】石川文化事業財団が設立した文学賞。「路傍の石」の著者である山本有三の功績を讃えて、さまざまな作品に与えられる。

三鷹市山本有三記念館

【東京都三鷹市下連雀 2-12-27 電話番号：0422-42-6233】

1953（昭和28）年に湯河原に移り住んだ有三は児童の育成のためにと、三鷹の家と土地を1956（昭和31）年に東京都に寄贈された。有三の意思を生かして、1958（昭和33）年に「有三青少年文庫」が開設され、文庫活動や教育相談などが行われた。1985（昭和60年）からはこの文庫が三鷹市に移管され児童書の貸出などを続けてきた。

三鷹市内の図書館の整備に伴い、1996（平成8）年1月をもって文庫活動を終了し、11月、山本有三の文献や身辺資料と共に住居を公開する記念館として生まれ変わった。

2 山本有三を記念する賞

妻山本はなさんの死後、「山本有三記念路傍の石文学賞」と「郷土文化賞」が設立され、1979（昭和54）年に第1回贈呈式が行われた。1987（昭和62）年からは財団法人石川文化事業財団顕彰事業部に運営が移管された。「路傍の石文学賞」は、第1回（1979年）に灰谷健二郎の『太陽の子』、川村たかし『新十津川物語』、第4回（1982年）に倉本聰『北の国から』、第5回（1983年）に黒柳徹子『窓際のトットちゃん』などが受賞している。

【注】「山本有三記念路傍の石文学賞」は第23回（2001年）受賞以来休止している。

3 もっと詳しく山本有三を知るには

- 1 『山本有三全集』全12巻 定本版 新潮社
* 第12巻の巻末に「著書目録」「作品別索引」「参考文献」「年譜」「アルバム」を掲載
- 2 『山本有三全集』全10巻 岩波書店
* 第1～2巻の巻末に戯曲の「初演表」を掲載
- 3 『山本有三』（近代文学鑑賞講座 第12巻）高橋健二編 角川書店 1959
- 4 『山本有三』（新潮日本文学アルバム）永野賢編 新潮社 1986.

- 5 『山本有三正伝』上巻 永野賢著 未来社 1987.7
 6 『山本有三の世界 比較文学的研究』(研究叢書) 早川正信著 和泉書院 1987.10
 7 『生誕100年記念 山本有三展』 山本有三記念会 1987
 8 『三鷹市有三青少年文庫』 三鷹市文化振興事業団 1991.2
 9 『三鷹市山本有三記念館』 三鷹市山本有三記念館 1996.11
 10 『山本有三生誕110年記念 未完の「路傍の石」展』 三鷹市山本有三記念館 1997
 11 『いいものを少し』永野朋子著 永野朋子刊 制作：独歩書林 1998.3
 12 『作家の全貌展 山本有三文学のすべて』 三鷹市山本有三記念館 2004
 13 『山本有三と三鷹の家と郊外生活』 三鷹市山本有三記念館 2006
 * p61 に三鷹市山本有三記念館が発行した資料の一覧リストを掲載
 14 『みんなで読もう山本有三』三鷹市山本有三記念館編 笠間書房 2006
 * p171~176 に布川純子編「山本有三参考文献目録」を掲載

4 山本有三年譜

西暦(元号) 年齢	事項
1887(明治20)年	7月27日、栃木県下都賀郡栃木町(現栃木市)に生まれる。父元吉、母ナカの長男。本名は勇造
1902(明治35)年 15歳	3月 栃木高等小学校卒業 4月末 東京市浅草区駒形町の伊勢福呉服店に丁稚奉公に出される
1903(明治36)年 16歳	奉公先を逃げ出して郷里の家に帰り、実家の呉服商を手伝う
1905(明治38)年 18歳	1月 上京。神田の正則英語学校に通う
1906(明治39)年 19歳	9月 東京中学校補欠試験に合格し、5年級に編入
1907(明治40)年 20歳	9月 父死去。第六高等学校入学をとりやめ家業の整理に従事
1909(明治42)年 22歳	7月 第一高等学校文科に入学
1910(明治44)年 24歳	処女作、戯曲『穴』を雑誌『歌舞伎』3月号に発表
1912(大正01)年 25歳	9月 東京帝国大学ドイツ文学科選科に入学
1915(大正04)年 28歳	7月 東京帝国大学ドイツ文学科卒業 11月 新派三角同盟一座の座付き作者、舞台監督を務める
1919(大正08)年 32歳	3月 英文学者本田増次郎の長女はなと結婚
1920(大正09)年 33歳	戯曲『生命の冠』を雑誌『人間』1月号に発表、劇作家として認められる 戯曲『女親』を雑誌『人間』9月号に発表
1921(大正10)年 34歳	戯曲『坂崎出羽守』を雑誌『新小説』9月号に発表
1923(大正12)年 36歳	戯曲『海彦山彦』を雑誌『女性』8月号に発表
1926(大正15)年 39歳	3月 北多摩郡武蔵野村(現武蔵野市)吉祥寺に新築移転 長編小説『生きとし生けるもの』を朝日新聞に連載
1927(昭和02)年 40歳	戯曲『西郷と大久保』を雑誌『文芸春秋』5月号に発表

1928 (昭和03)年	41歳	長編小説『波』を朝日新聞に連載
1932 (昭和07)年	45歳	長編小説『女の一生』を朝日新聞に連載
1935 (昭和10)年	48歳	長編小説『真実一路』を雑誌『主婦の友』に連載
1936 (昭和11)年	49歳	4月 北多摩郡三鷹村下連雀91 (現三鷹市)の洋風建築の家を購入移転 【注】
1937 (昭和12)年	50歳	長編小説『路傍の石』第1部を朝日新聞に連載
1939 (昭和14)年	52歳	11月『山本有三全集』全10巻(岩波書店)を刊行開始
1940 (昭和15)年	53歳	『新編・路傍の石』を検閲により連載中止
1941 (昭和16)年	54歳	7月 帝国芸術院会員に推される。母ナカ82歳で亡くなる
1942 (昭和17)年	55歳	7月 「ミタカ少国民文庫」を開く 戯曲『米百俵』を雑誌『主婦の友』1/2月号に発表
1945 (昭和20)年	58歳	12月 三鷹国語研究所を邸内に開設
1946 (昭和21)年	59歳	1月 国民の国語運動連盟結成 5月 貴族院議員に勅撰される 11月 三鷹の家が進駐軍に接收される
1947 (昭和22)年	60歳	4月 参議院議員選挙全国区に立候補、9位で当選 6月 文化委員長に推される
1949 (昭和24)年	62歳	中編小説『無事の人』を雑誌『新潮』4月号に発表
1951 (昭和26)年	64歳	12月 自宅の接收解除。国立国語研究所分室に提供
1953 (昭和28)年	66歳	5月 参議院議員任期満了 12月 「理想の家」を神奈川県足柄下郡湯河原町宮上に新築
1954 (昭和29)年	67歳	2月 関西旅行(大津、京都、奈良、飛鳥などの古跡探訪) 以後、毎年、古代史研究旅行をする
1956 (昭和31)年	69歳	9月 三鷹の家と土地を東京都に寄贈する
1958 (昭和33)年	71歳	1月 三鷹の家は東京都立教育研究所三鷹分室となり「有三青少年文庫」 として開館
1965 (昭和40)年	78歳	12月 第25回文化勲章授与
1972 (昭和47)年	85歳	2月 日本近代文学館顧問に就任
1973 (昭和48)年	86歳	4月 『濁流 雑談 近衛文麿』を毎日新聞に連載開始、41回で中断
1974 (昭和49)年	86歳	1月4日 国立熱海病院に入院。11日午前5時脳梗塞急性心不全で永眠 栃木市の近龍寺に埋葬される

【注】『いいものを少し』のp100ある「外国のおとぎ話の家のような家。イギリス帰りの学者の左右田さんという方が昭和のはじめに建てた」家。奥野健男が「三鷹の下連雀に住む太宰治が戦争中弟子の文学に囲まれて酔って帰る途次、同じ三鷹に住む山本有三の豪華な洋風の邸の前を過ぎる際、この邸に石を投げようと言いつつ弟子たちが実際に石を投げたら、太宰はおれが投げると言ったからってほんとうに投げるなんてとんでもない奴だと泣いた」(『三鷹市山本有三記念館』のp10)というエピソードを紹介している。